シルクロードにおける弥勒関係仏典の研究
―トカラ語およびコータン語資料を中心に―

荻　原　裕　敏
中国人民大学国学院西域歴史語言研究所　講師
（現　京都大学白眉センター／文学研究科　特定准教授）

緒　　言

筆者は、中央アジア地域で発見されたイスラム化以前の文献言語、とりわけトカラ語で書かれた文献の文献学的研究を専門としている。トカラ語とは印欧語に属する文献言語で独自にトカラ語派を形成し、トカラ語Ａおよびトカラ語Ｂと称される二つの言語から成り立っている。トカラ語Ａは主に新疆ウイグル自治区のトゥルファン～ショルチュク、トカラ語Ｂはトゥルファン～トゥムシュクにかけての地域の仏教遺跡を中心として、19世紀末から今世紀初頭にかけて主要な資料が発見された。現在、トカラ語文献はドイツ・フランス・イギリス・ロシア・中国・日本に所蔵されているが、それらはおおむね5～11世紀にかけて作成されたとされており、宗教文献と非宗教文献に二分される。宗教文献の大部分はインドに由来するブラーフミー文字で書写された仏典であるが、マニ文字によるマニ教文献も極少数知られている。トカラ語仏典には大乗仏典は知られておらず、部派仏教、特に広義の説一切有部に属するとされる。これら各国所蔵のトカラ語文献の総数は、約八千点に上ることが知られており、筆者はトカラ語文献を利用して、トカラ仏教の仏教史における位置づけやインドから伝えられた仏教をトカラ仏教がどのように受容したか、あるいはインドに由来する仏教がトカラ仏教でどのように改変されたか、といった仏教史的な問題の解決を目指しており、広く仏教史の観点からトカラ仏教とはいかなるものであり、どのような実体を備えていたかを解明したいと考えている。

本研究で、筆者は仏教史上の重要な課題の一つである弥勒信仰の中央アジア地域における伝播と受容についての一端を解明することを目指した。すなわち、インドに由来する弥勒信仰は、中央アジアを経て中国・朝鮮・日本などに伝わり、これらの地域の仏教の発展に大きく貢献しただけでなく、政治的にも多大な影響を与えたことが広く知られている。弥勒信仰の起源およびその展開は、これまで仏教美術史や歴史学の観点からアジア各地域における受容と発展について研究が為されてきた。筆者が専門とする文献学から弥勒信仰の伝播について見た場合、梵語および漢訳仏典中に残存する弥勒経典と称される仏典が重要な資料であり、梵語の《*Maitreyavyākaraṇa*》および《*Maitreyāvadāna*》や漢訳『弥勒下生成佛経』・『弥勒大成佛経』といった所謂「弥勒六部経」を挙げることができる。しかし、これら梵語・漢訳による仏典だけでは弥勒信仰の展開を跡づけることができないことは言うまでもなく、インドと中国の中間に位置し、その後の仏教の発展にも影響を与えたとされる新疆地域を含めた中央アジア地域で発見される文献にも目を配ることが必要である。

研究の方法

中央アジアで発見された文献中、弥勒関係仏典としてはトカラ語Ａによる《*Maitreyasamitināṭaka*》および古代ウイグル語の《*Maitrisimit nom bitig*》が著名であるが、ウイグル語写本に残された跋文により、トカラ語Ａのものからウイグル語に翻訳されたとされている。この両言語による当該仏典の資料は完全には残っていないが、より多くの断片が残っているウイグル語断片から、この文献は全体が二十八章からなっていた劇本であったと推定され、新疆地域、特に西域北道における弥勒信仰の展開を研究するうえで重要な資料である。この文献についてはウイグル語写本がトカラ語Ａを原典としていたとされることから、比較研究が行われ、すでに数多くの成果が挙がっている。しかしながら、中央アジア地域の文献資料中には、その他にも弥勒に関連する文献資料が知られており、これらの資料も視野に入れなければならない。例えば、バクトリア地域の言語であったバクトリア語には弥勒に言及する護符が一点存在している。ま

た西域南道の仏教の中心地であったコータンの言語であるコータン語による『ザンバスタの書』第二十二章は弥勒の下生を扱ったものであり、1919年にE. Leumannによって比較研究が為されたが[1]、漢訳・梵語・パーリ語のみを比較材料としている。

コータン語『ザンバスタの書』第二十二章の重要性を指摘し、先に挙げた梵語やトカラ語A・ウイグル語による弥勒関係仏典と比較し、その位置づけを試みたのはコータン語の専門家である熊本裕である[2]。熊本の研究によれば、『ザンバスタの書』第二十二章は、梵語とトカラ語A・ウイグル語文献の中間の発展段階に位置づけられる。この熊本の研究は、中央アジア地域における弥勒信仰の展開を文献学的に研究するうえで、西域南道に由来するコータン語資料を初めて視野に入れたものとして重要であるが、西域北道の仏教の中心であったクチャの言語であるトカラ語Bによる弥勒関係文献が学界にはほとんど知られていなかったため、従来の研究と同様にトカラ語B文献を比較の対象とはしていない。

このような状況に鑑み、本研究では美術資料・考古学研究なども考慮に入れたうえで、従来研究対象とはならなかったトカラ語B文献中に含まれる弥勒関係断片の網羅的調査を行い、梵語や漢訳仏典だけでなく、特にコータン語資料との比較により、クチャ地域における弥勒信仰をその展開過程の中に位置づけることを目的とした。筆者の調査によれば、約1200点中100点近くの断片が弥勒関係とされるトカラ語A文献に対し、六千点弱の断片を有するトカラ語B文献には弥勒関係の断片は少数しか含まれていないが、キジルで発見されたと推定される未出版のドイツ所蔵トカラ語B断片THT1859およびTHT1860にはコータン語『ザンバスタの書』第二十二章と比較し得る記述が含まれている点が明らかになった。そのため、THT1859およびTHT1860と『ザンバスタの書』第二十二章との比較に重点を置いて研究を進めた。これらの文献の比較に際しては、前述のE. Leumannによる研究だけでなく、1968年に出版されたR. E. Emmerickによる再校訂・英訳も利用した[3]。

結果と考察

ドイツ所蔵トカラ語B断片THT1859およびTHT1860は、書写に利用されたブラーフミー文字の様式および言語特徴の両面からArchaic Tocharian Bと称される段階に位置づけられ、成立年代はおおよそ5〜6世紀と推定されており[4]、これらの特徴から、両断片はコータン語『ザンバスタの書』第二十二章と共に、中央アジア地域に5世紀頃に流布していた弥勒信仰を反映していると考えられるが、両断片全体の解釈や内容比定、またそれに基づいた他言語による文献との比較および仏教史における位置づけ等が未解決のままとなっていた。筆者は漢訳仏典等の関連文献を利用して、両断片の内容比定を行うと共に、中央アジア仏教史における両断片の位置づけを検討した。

まず、THT1859は、弥勒が出家した人々を伴い摩訶迦葉を訪れ、摩訶迦葉が彼らに十八変を示す場面を中心としているが、ここではこの場面に先行する弥勒による三度の説法が簡略化されていた可能性が指摘される。仮にこのような推定が正しいならば、弥勒による三度の説法について詳細に述べる一方で、摩訶迦葉による十八変が一つのstropheのみで言及される『ザンバスタの書』と著しい対照を為すと言うことができる。また、言語学的に重要な点として、弥勒が摩訶迦葉を訪ねた山の名前である*kukūrapādā*は、最近出版されたロシア蔵メルブ出土梵語仏教説話集に含まれる同一の場面を描いた箇所に在証される*kukkurapāda-*という語形と明らかに関係づけられる点を指摘しておきたい[5]。

一方、THT1860にはどのような行いをすれば弥勒に会うことができるかが説かれており、仏陀によって弥勒下生が語られた後の部分に対応すると推定される。すなわち、漢訳『佛説彌勒大成佛經』「汝等宜應勤加精進。發清淨心起諸善業。得見世間燈明彌勒佛身必無疑也。」（『大正新脩大藏經』第十四巻，No. 456, 434a19–21）に関連する可能性を指摘することができるが、仮にこの推定が正しいならば、THT1860は『佛説彌勒大成佛經』とは異なり、この部分の内容が大幅に増補されていることとなる。

残念ながら、トカラ語文献中には関連する断片は他には見出すことができず、この二断片から性急に結論を導くことは控えるべきではあるが、ここでは弥勒の事績が重視されていたというよりも、摩訶迦葉を媒介とした弥勒による仏法の継受およびいかにすれば仏法を継承した弥勒に会うことができるかという点に力点を置いた内容となっているように推定される。筆者の推定が正しいならば、THT1859およびTHT1860は、弥勒の事績を体系的に語る『佛説彌勒大成佛經』および『ザンバスタの書』第二十二章、トカラ語A《*Maitreyasamitināṭaka*》や古代ウイグル語《*Maitrisimit nom bitig*》とは異なり、弥勒の事績そのものについては簡略化された内容を有し

ており、編纂方針および思想的背景が異なっていた可能性も指摘することができる。

クチャにおける弥勒信仰については、主としてキジルなどの石窟に描かれた壁画や大仏を利用した研究が為されてきたが、この地域の言語であったトカラ語Bによる資料は研究者にはほとんど知られていないため、これまで利用されることがなかった。その結果、従来の研究では、クチャにおける弥勒信仰については上生信仰を反映する壁画の存在のみが指摘され、大仏以外には下生信仰を示す明確な資料は確認されていなかったことから、クチャ地域における弥勒信仰は石窟に描かれた壁画が反映する上生信仰の文脈で語られることが多かったが、THT1859およびTHT1860はクチャには下生信仰も存在していた点を文献学的に証明することができるだけでなく、弥勒信仰の展開をより詳細に研究する材料を提供する。仏教史における弥勒信仰の展開全体におけるクチャ仏教の位置づけについては、改めて再検討を行う必要があると言えよう。

要　約

トカラ語B文献中に含まれる弥勒関係断片の網羅的調査を行い、梵語や漢訳仏典だけでなく、特にコータン語資料との比較により、クチャ地域における弥勒信仰をその展開過程の中に位置づけることを目指した。約1,200点中100点近くの断片が弥勒関係とされるトカラ語A文献に対し、六千点弱の断片を有するトカラ語B文献には弥勒関係の断片は少数しか含まれていないが、キジルで発見されたと推定されるドイツ所蔵トカラ語B断片THT1859およびTHT1860にはコータン語『ザンバスタの書』第二十二章と比較し得る記述が含まれている点が明らかになった。この二断片は下生信仰を反映していることから、従来上生信仰の文脈で語られることが多かったクチャ地域における弥勒信仰は、弥勒信仰の展開全体における位置づけが改めて再検討される必要がある。

謝　辞

本研究の遂行に際しては、公益財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金の助成を賜りました。奨励金により、関連分野の書籍の入手だけでなく、国際仏教学会大会に参加し情報交換を行うと共に、自身の研究発表に関する有益なコメントを頂戴することができました。財団の関係者の方々および審査にあたられた諸先生方に深く感謝申し上げます。

文　献

1) E. Leumann: *Maitreya-samiti, das Zukunftsideal der Buddhisten. Die nordarische Schilderung in Text und Übersetzung*, Karl J. Trübner, 1919.
2) H. Kumamoto: *The Maitreya-samiti and Khotanese*, http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~hkum/works_j.html.
3) R. E. Emmerick: *Book of Zambasta*, Oxford University Press, 1968.
4) M. Malzahn: *Instrumenta Tocharica* (M. Malzahn, ed.), Winter, pp. 255–297, 2007およびM. Peyrot: *Variation and Change in Tocharian B*, Rodopi, 2008.
5) S. Karashima, M. I. Vorobyova-Desyatovskaya: *Buddhist Manuscripts from Central Asia: The St. Petersburg Sanskrit Fragments* (Volume I), pp. 145–523, International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2015.